

乃木大将の手紙

紹介者 林 寅 喜

『解説』

明治の元勳といわれている乃木希典は、嘉永二年（一八四九）十一月長州藩士乃木希次の子として生まれ、幼少のころ吉田松陰門下の叔父玉木文之進について学び、維新では奇兵隊と共に幕府軍と戦ったが戊辰戦争では東北に転戦し、戦後その功によって明治四年（一八七二）陸軍少佐となり、十年の西南戦争では小倉第十四連隊長として従軍したが、軍旗を奪われたことで強く責任を感じ、これを『終生の遺恨とした』という話はよく知られている。

三十七、八年の日露戦役では、第三軍司令官として二百三高地の攻略戦を指揮したが、多くの将兵を犠牲にし

て得た勝利であった。のち学習院長となったが大正元年九月十三日、明治天皇御大葬の号砲と同時に妻静子と自決（殉死）した。享年六十二歳であった。

紹介した手紙は消印と日付から明治四十四年四月二十日と見られ、自決した日から約一年五ヶ月前のものである。手紙は当時廣島第五師団長であった眞鍋斌（陸軍中将）に宛てたもので、眞鍋は希典と同じ元長州藩士で三歳年下であった。

この手紙の内容で特筆すべき事項としては、同じ軍籍の人たちから薦められていた養子縁組の斡旋を断り、乃木家は今後存続させる積りは全くないといった点である。

希典には勝典・保典という二人の子がいたが、勝典は三十七年五月南山の戦闘で、保典は同年十一月二百三高地の攻防戦でそれぞれ戦死している。頁数の関係で掲載はしていないが手紙の末尾には、希典が二人を偲んで詠んだ和歌が五首添えられており、それは子を思う親の愛情に満ち溢れたものばかりで、心情を察するに余りあるものがある。これ等を考え合わせて見ると、希典は、予から後顧の優いなき死を覚悟していたのではなかった

か、と推察される。

【参考図書】 大日本人名辞典

歴史群像日露戦争

お断り

今回は内容が佐伯地方の歴史と全く関係のないものを



採用しました。御了承下さい。

なお、一七〇号から連続して掲載して参りました『古文書紹介』も今回を以って終了させて頂きます。長い間ありがとうございました。

東京赤坂

乃木希典

四月廿日

安藝国廣島市

眞鍋
男爵

眞鍋陸軍中将殿

御返
 追日暖氣相加里申候
 處 貴官愈々御健勝
 の段 大慶此事二存
 候 次二愚生義至極無
 事罷在候間 御放念
 被下度候 然バ今回ハ
 御地ノ名産タル干柿
 譯山ニ御惠贈被下

拜啓

追日暖氣相加里申候

處 貴官愈々御健勝

の段 大慶此事二存

候 次二愚生義至極無

事罷在候間 御放念

被下度候 然バ今回ハ

御地ノ名産タル干柿

譯山ニ御惠贈被下

昨廿日到着 難有御
 厚礼申上候 扱テ昨
 年御上京の際 承リ
 置候一件ニ就テハ
 其後両三度桂大将
 及ビ 山梨兄ト打合セ
 申候處 至極圓滿
 二進歩致居候 次第
 二付 近日決定の上

昨廿日到着 難有御

厚礼申上候 扱テ昨

年御上京の際 承リ

置候一件ニ就テハ

其後両三度桂大将

及ビ 山梨兄ト打合セ

申候處 至極圓滿

二進歩致居候 次第

二付 近日決定の上

御通報可申上候
 本件二就テハ 一應山
 縣元帥迄ハ 申進メ
 置ク必要の有之カト
 存候 貴意如何ニ候
 ヤ 次便ニテ御内報相
 煩度候 元帥ニハ目下
 小田原ノ古稀庵ニ
 静養中ナルモ 近日帰

御通報可申上候

本件二就テハ 一應山

縣元帥迄ハ 申進メ

置ク必要の有之カト

存候 貴意如何ニ候

ヤ 次便ニテ御内報相

煩度候 元帥ニハ目下

小田原ノ古稀庵ニ

静養中ナルモ 近日帰

京ノ由 其節小生面会
 ノ上 委細伝言可致候
 間 御安心相成度候
 尤モ 貴兄ニモ御意見
 有之バ 腹藏はらぐらうナク御内
 報相願度候 且又
 御上京ノ際御諭言
 被下候愚生養子ノ
 件ハ 川村大兄其他

京ノ由 其節小生面会

ノ上 委細伝言可致候

間 御安心相成度候

尤モ 貴兄ニモ御意見

有之バ 腹藏はらぐらうナク御内

報相願度候 且又

御上京ノ際御諭言

被下候愚生養子ノ

件ハ 川村大兄其他

不省軍職中ノ知己
 ヲリ 屢々御厚意ヲ
 相受ケ申居候へ共
 斯テハ天理ニ犯覺
 事ニ相成ル次第
 家ハ今後存族ノ見
 込ハ更ニ無之候間 御
 厚情ノ程ハ難有
 存候へ共 絶対ニ御辞

不省軍職中ノ知己

ヨリ 屢々御厚意ヲ

相受ケ申居候へ共

斯テハ天理ニ犯覺

事ニ相成ル次第 弊

家ハ今後存族ノ見

込ハ更ニ無之候間 御

厚情ノ程ハ難有

存候へ共 絶対ニ御辞

退申外無之 何卒
 不愆御宥恕被下度
 上願候 乍末筆佐藤兄
 二宜敷御伝言相願度
 先八右御礼 旁 御回答
 迄 如此候 草々
 四月廿日
 希典拜

眞鍋大兄貴下

この手紙(コピー)はろざんじん書房から頂いたものです。